
流れ星

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星

【著者名】

景雪

【著者名】

ZZマーク

【著者名】

あらすじ

リチャードはアメリカ西海岸で暮らす、90を超えた老人。ある日、孫のマイクが、まだ父親のエドワードにも紹介していない日本人のフィアンセを連れて来る。マイクが真っ先に彼女を紹介しようとしたのは、リチャードがかつての戦争で、日本人と戦った経験を持つているからだった

「グランパ。紹介したい人がいるんだ」

孫のマイクは高い声が良く通る。リチャードはロッキングショアーに深く腰を掛けながら、長年腕でこすられてすり減ったひじ掛けをゆっくりなでる。

「エドにはもう紹介してあるのか？」

父親、エドワードの名前を聞き、マイクはつづむじて何も言葉を発することができない。結婚相手を紹介するならまずはエドだろう。そう思つたがリチャードは言葉にしなかつた。マイクが敢えて一番に自分のところに来たのは、何か理由があつてのことだと思つたからだ。

「ファインセカ」

「……うん」

すぐに返事をしないのは、後ろめたい何かがあるのだろう。エドよりも先に私に紹介しようと思つたのもそのためだろうか。リチャードはロッキングショアーを揺らしながら思つた。

「連れて來い。いるんだろう？ 玄関の外に」

「……うん」

マイクはゆっくり後ずさりすると、玄関の外に消えていった。玄関の戸が開いて一瞬、外の光が田をくらませ、リチャードは長く伸びた眉毛で瞳を閉ざすように眩さを防いだ。近所に住んでいふのはいえ、早起きが苦手なマイクが午前中に訪ねて來ることは珍しい。リチャードは陽がほとんど入り込まない部屋の、分厚い暗がりにぼんやりと視線を合わせていた。そういうふしていふと再び戸が開き、光がすっと差し込み、光の帯は段々と太くなつていった。部屋にこもつていた埃が舞い、それが照らされ細かい粒となつて漂つた。

「グランパ。ミス・ヤマダだ」

「はじめまして。キヨウコ・ヤマダです」

リチャードは皺の深く刻まれた瞼をほとんど横一線に閉じ、突然飛び込んできた外界の明かりに視野を奪われてしまったが、「ヤマダ」というファミリーネームと、訛りの強い英語はしっかりと聞き取ることができた。

「グランパ。彼女は日本人だ。だからグランパに最初に紹介したかつたんだ」

緊張している時、マイクは高い声が一層高くなる。リチャードはまだぼんやりとしか見えない視界に二人の人影を捉え、眼球を包み込むように三回強く瞬きをした。

「グランパが戦争で日本人と殺し合ったことは知ってる。でももう昔とは違うんだ。彼女には何の罪もない」

やつと焦点が定まりリチャードの瞳に、細身で髪の長い東洋人の女が映った。自分の居場所を探せずにいるのか、いつになく饒舌なマイクとは対照的に、彼女はうつむいてじっと黙っている。

「彼女は、ロマリンダ大学の同級生なんだ。グランパの後輩だよ」そこまで聞いて、リチャードはおもむろに立ち上がった。口を開こうとした瞬間にリチャードが日本人のフイアンセに怒っているものと思いつ、マイクは慌てて次から次に様々な言葉をかけた。けれど祖父は黙つたままで、二人の姿が見えないのかまっすぐに家の外に向かつた。ミス・ヤマダは高齢の割に大柄なりチャードを、後ずさりして大げさによけた。

「グランパ。聞いてくれよ

マイクを右の掌で制し、リチャードは言った。

「マイク。ミス・ヤマダ。時間はあるか？ ちょっと行きたいところがある

「え？」

「時間がかかるぞ。いいか？」

「うん……夏休みだから時間はあるよ

マイクは短く返事をし、ミス・ヤマダも遠慮がちに頭を縦に振つた。

リチャードは同じように口を開けたまま彼を見つめる一人を尻目に、九十を過ぎても衰えない足取りで海岸に向けて歩く。真夏の西海岸は雲が多いが、切れ目からは薄く気持ちの良い青が覗いて好天を告げていた。

「グランパ。どこに行くんかい？」

「後で話す。とりあえず船に乗れ

「え。クルーザーで行くのかい？」

「船に乗られるんですか？」

ミス・ヤマダの問いかけにリチャードは答えない。代わりにマイクが答えてくれることが良く分かっているからだ。

「グランパは若い頃からずっと船に乗つていてるんだ。世界一周もしたことがあるんだよ」

「すごい

「今じゃ年寄りの道楽だ。食料と飲み物を積もう

最初からそう決まつていたかのように、三人は分担して準備を進め、まだ太陽がてっぺんまで昇る前に西海岸を発つた。

海は濃く、緑と青を凝縮していた。徐々に離れていく西海岸の街並みは、山肌のように密集した建物の所々に高いビルが突き出て見えた。

「どこに行くの？ ハワイ？」

「焦るな。長い船旅になる」

操縦席でハンドルを繰るリチャードの斜め後ろにマイクが立ち、すぐ後ろの席にミス・ヤマダが腰をかけた。リチャードの操縦は的確で、六十年培つた経験は皺の一本一本にまで染み込んでいる。街が見えなくなつてから、リチャードはゆっくりと口を開いた。

彼の操縦に安心したのか、マイクもミス・ヤマダの隣に座つていた。

「マイク。わしが戦争に行つた時の話をしたことはなかつたな？」

「……うん」

てっぺんまで昇つた太陽は強烈な日差しを海面に注ぎ、照り返し

が操縦席の窓から時折入りこんだ。リチャードはサングラスのつるを握つて位置を直した。

「あら。随分古い聖書」

ミス・ヤマダが彼女の側に置いてあつた聖書を見つけて手に取つた。背の部分が崩れそうに古い物で、表紙にはくすんだ染みができていた。

「それはグランパがいつも大切にしている聖書だよ。美人のシスターにでももらつたんじゃないの？」

そう言って笑うマイクの声など少しも気にせず、リチャードは船の進行方向を見据えたまま一人に言った。

「ちょっと長くなるが、退屈しのぎに聞いてくれるか？ 勿論、ミス・ヤマダも」

二人は「うん」「はい」と同時に返事をした。それを聞いてリチャードは乾いた唇を舌の先で湿らし、数秒の間を置いて話し始めた。

カズオ・タニグチ

リチャードが生まれた南カリフォルニアは当時急速に発展していたロサンゼルス、サンディエゴ、サンフランシスコといった大都市を有し、人口の増加に伴い医療機関の充実、医師の増加が求められていた。リチャードがロマリンダ大学で医学を専攻することになったきっかけはまさに、そういうた需要に応え、医師として州に貢献したいと思ったからだつた。カリフォルニアは合衆国で一番大きな州だから、外国から学びに来ている学生も多かつた。カズオ・タニグチも日本から留学に来ている学生だつた。

丸顔でいつも眼鏡をかけているカズオは、あまり口数が多くはなかつたが真面目な学生で、敬虔なクリスチヤンでもあつた。彼は進んだ医療技術を習得し、祖国に還元するためにアメリカに来ていた。韓国の併合、満州国の建国、急速に中国での利権を拡大している日本を、リチャードは快く思つていなかつた。であるからカズオに最初会つた時も、眼鏡の奥にひつそりと覗く彼の目の細さを、侮辱の気持ちでもつて一瞥した。リチャードの肩ほどしかない背の高さ、長い胴と短い手足も、自らが生まれ持つた血筋に優越感を抱くのに十分だつた。

リチャードはポールという背の高い同級生と仲が良かつた。ポールは男前で口が上手かつたから、いつもガールフレンドと一緒にいた。ポールは表面上、気さくで良い男だつたが、強い酒で女を酔わせていたずらをするようなこともあり、あまり素行は良くなかつた。ある日、リチャードとポールは同じ学部の女学生二人を誘つて地下の酒場で酒を飲んだ。女学生の内の一人がコリコ・マツオカといふ日本から来ている学生で、ポールは最初から彼女に目をつけていた。「ジャップの野郎は嫌いだが、女は特別だ。どんな物が付いてるか、一度確かめるのも良いだろ?」それがポールの口癖だつた。リチャードは積極的に彼に加担しようとは思えなかつたが、だ

からといって日本人の女に同情する気もなかつた。

ここで飲む物は任せてくれと、ポールは甘くて飲みやすく、アルコール度数の高い酒ばかりを一人の女に飲ませた。どこからどうやつて引っ張り出してきたのか、次から次に出てくるポールの話に一人の女学生は引き込まれ、お代わりを頼むまでの時間が目に見えて短縮された。五杯も飲むと一人の女は千鳥足になつてしまい、当初の目的通りにポールはミス・マツオカの肩を抱きながら先に店を出て行つた。リチャードはもう一人の決して美しいとは言えない白人の女を成り行き上仕方なく連れて歩くことになつた。白人女は、彼女の実家で飼つている肉牛の筋肉が逞しいことを、通行人が顔をしかめて振り返るほどの大聲で延々と語り続けた。元からほんの少しも興味がなかつたので、リチャードは彼女をタクシーにほとんど押し込んで家に帰し、また夜のビジーストリートを目的もなく歩いた。それ違う男たちは何故だか軍隊に身を置いているらしい服装の者が多く、リチャードはその顔を見る度に唾を吐きかけてやりたい衝動にかられた。リチャードが最も嫌う職業が軍人だつた。危険に身を晒しているという自己陶酔からか、軍人以外の人間の前で必要以上に横柄になる態度が気にくわなかつた。

適当に目についたバーで安酒をあおり、無駄に時間を費やしていくと、もうとっくに深夜だというのに何やら騒がしい声がしたのでリチャードは表の通りに出た。なんとそこには人ごみに囲まれて対峙するポールとカズオ・タニグチがいた。二人は汚い言葉を投げながら罵倒し合い、今にも格闘を始めんとしている。周りを囲むがらの悪い者たちがさかんに煽り、ほとんどの者が「やつちまえ！」とか「ジャップを殺せ！」とかポールを味方している。六フイートを優に超えるポールと五フイートと少しのカズオ・タニグチが向かい合えば、周りが応援しなくとも勝負の結果は決まりきつているように思えた。

「何故ミス・マツオカを傷つけた！」

「彼女の方から誘つてきたんだ」

「ふざけるな！　日本では結婚前の女子は貞操を守るんだ！」

「ここはアメリカだぞ！　黄色い猿が！」

カズオ・タニグチは“黄色い猿”という台詞が許せなかつたのか、勢いをつけてポールの方向に踏み込んだ。ギャラリーが拳を突き上げて「やれ！」「いいぞ！」と叫ぶ。ポールが狙いを定めて右の拳を突き出す。カズオ・タニグチはポールの拳を俊敏な動作でもつてかわし、拳が空を切つてのけぞつたポールの懷に入ると、姿勢を低くして腰の上に器用に彼の大きな身体を乗せ、回転させて投げ飛ばした。背中から石の地面に叩きつけられたポールは、声も出せないのか顎を大きく突き出して息だけを荒く何回も吐いた。

「今度、彼女に同じことをしてみろ。一度と女を抱けないようにしてやるからな！」

カズオ・タニグチはそれだけ言い残して革靴を打ち付ける音を響かせながら去つていった。あれほど興奮していたギャラリーは体温が一度も一度も急激に下がつたのか、どうでもいい捨て台詞を口々につぶやきながら散らばつていった。物静かな姿しか知らないカズオ・タニグチの、感情を沸騰させる様をリチャードはすぐにそのまま受け入れることができなかつた。涼しさが多く含まれるようになつた九月の夜風に、上着の半袖から出たままの肌を吹かれ続け、リチャードは身振るいを一つした。

翌日、まだ痛むのか背中を丸めながら登校したポールに会い、リチャードは昨日の顛末を聞いて驚愕と言つよりはあやうく噴き出しそうになつた。

「ミス・マツオカのアパートに行つて、ベッドに押し倒したら股間を思いつきり蹴り上げられたんだ。更に彼女は日本のカタナを抜こうとするんで、俺は股間を押さえながら慌ててアパートの外に出で、カズオ・タニグチにばつたり会つてしまつた」

「災難だなあ。お前」

「人ごとだと思って……」

リチャードとポールがそんな会話をしながらキャンパス内を歩い

ていると、向かいからカズオ・タニグチとミス・マツオカが並んで近付いてくるのに気付いた。ポールは咄嗟に身体を横に向け進行方向を変えようとしたが、リチャードは彼の太い腕をつかんで元の位置に強引に引き戻した。

「やあ。クラスメイト」

カズオ・タニグチはポールに向けて右の掌を差し出した。ポールは視点をどこに定めれば良いのか戸惑っている風だったが、リチャードが膝で軽く小突くとその掌を取った。二人はお互いの掌をつかみ、二回強く上下に振った。ポールははにかんでいるのかしかめつ面をしているのかすぐには分からぬ表情をしていたが、カズオ・タニグチは歯並びの良い前歯を覗かせながら明らかに笑顔と分かる顔を見せていた。リチャードはその時初めて、日本人に対し人間として接することができるような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8577z/>

流れ星

2011年12月27日20時54分発行